



vol.11 夢見る未来特集！

*2025年2月発行 *企画・制作・発行・デザイン／朝ドラ「らんまん」顕彰会
〒789-1201 高知県高岡郡佐川町奥の土居 市川方 kawazumakeruna@bell.ocn.ne.jp

高知県の生物標本は、いま近い将来、高知県産の自然史科学標本、特に生物標本の行先を模索する事態がやって来ます。これらの多くは個人収集標本で、現在の高知県の生物標本保管施設と体制の状況からみると、高知県外へ流出する可能性が極めて高いです。そこで私も参加しているこうちミュージアムネットワークでは、現在高知県内にどのような自然史科学標本があるのか、その量や保管管理の状況はどうなっているのか、今後どの程度の期間現状を維持できるのかの調査が令和3年度に行われました。

設備を得るための聞き取り調査が、標本を保管するために必要で、標本を適切に管理で

を令和3(2021)年7月1日から9月30日にかけて実施しました。対象者は、「高知県内在住で生物標本を所有している個人・団体」としました。対象者には電話もしくは「ココロ」にて調査の申し入れを行い、所有している標本を拝見させていただきながら情報を得るようでした。聞き取り項目は、所有している標本の分野、標本の形態、現在の所在地、所有者名・連絡先、管理者名・連絡先、採集データの有無、標本点数、収蔵に必要な体積、現状のまま維持できそうな期間、その他としました。さらに高知県が、標本を保管するために必要な

きる人材を配置した県立自然史博物館的な施設を設置した場合、「博物館活動に協力する意思があるか?」についても、お聞きしました。調査の結果、高知県には様々な生物標本を所有の個人・団体が69件ありました。その方々が所有の標本を、生物分野別に整理して見たところ、そのコレクション数は132件(約235,000点)あることが分かりました(写真1、4)。所有者の方に現状のまま維持できる期間について尋ねると、10年以上維持できるという回答が48件(約16万点)、10年以内に維持できなくなるとの回答が11件(7万点以上)、さらに5年以内にならな



写真4



写真3



写真2



写真1



高知県に必要と考える自然史博物館の具体的なイメージ資料

高知県に県立自然史博物館ができることを目指して
谷地森秀二(高知に自然史博物館をつくる会)



高知県佐川町の特産品や素材をふんだんに使った、こだわりのかき氷が全 29 種類! 町内 11 店舗が、それぞれの個性とアイデアを込めて仕上げた「ここでしか食べられないかき氷」が大集合!



郵船ロジスティクスグループは、持続可能な未来へ向けて、地域の皆さまとともに歩みます

https://www.yusen-logistics.com/jp_ja/



料を作成しました。そして作成したイメージ資料を用いて、高知県の自然の変遷の証拠である標本を残すためには、このような施設が必要であることを伝え、「高知県にこうした施設を作り上げる必要があるのか?」、「作ったら活用するか?」などの意向を把握するアンケート調査を令和7年1月1日より開始しました。標本保管場所としては、旧須崎高等学校の教室が利用できそうか8〜12月にかけて教室内に温湿度計を設置し、標本保管に適正な環境であるかを調査しました。

アンケート調査では、4月30日の時点で、3,990件以上の回答を得ました。このうち、「高知県に県立自然史博物館ができれば行ってみたいと思う」との回答は3233件(81%)で、多くの方に高知県立自然史博物館設立に賛同してもらえることが分かりました。アンケート調査は現在も継続しています。高知県民からの回答数が10,000件となった時点もしくは本年末時点で最終集計を行い、高知県民の民意として高知県に示すつもりです。旧須崎高等学校の教室で行った環境調査では、現状のままでは標本保管に不適でしたが、光と熱を遮断するために窓へ銀マットなどを張り付けたり、湿度管理のために除湿器を導入したりすれば、活用できることが分かりました。この情報はすでに高知県に提供しました。引き続き標本保管場所として廃校の利用を模索しています。

高知県に県立自然史博物館ができることを目指して

今年度は、高知県民へ向けて「高知県に自然史博物館をつくる重要性」を呼びかける巡回パネル展を、以下の会場と日程で開催します。

巡回パネル展

■のいち動物公園

9月20日〜10月13日

■室戸世界ジオパークセンター

11月3日〜11月17日

■高知みらい科学館

11月11日〜12月2日

■道の駅「ビオス大方」

11月18日〜12月1日

■足摺宇和海国立公園
竜串ビジターセンター

1月17日〜1月31日

■高知県庁1階ロビー
(調整中)

パネル展で紹介する内容は、「高知の自然史資料の現状」、「高知県が行っている自然史科学標本に対する取り組み紹介」、「標本の散逸・消滅を避けるために一時保管場所構築(廃校校舎利用を模索)」、「アンケート「高知県に自然史博物館ができることについて、どうですか?」の紹介」、「こんな自然史博物館ができれば」、「提案」で構成します。また、「高知県内に自然史博物館をつくる意義」について有識者と県民とで意見の交換と情報の共有化をおこなうシンポジウムを、2026年1月10日13時から16時30分にかけて、オーテピア4階ホールで開催します。多くの方と意見を交わし、力を合わせて高知に県立自然史博物館設立を目指します。

昨年に引き続き、マキノジンが世界に認められました！

IWSC(インターナショナル・ワイン・アンド・スピリッツ・コンペティション)でシルバー賞&とブロンズ賞を受賞、おめでとうございます！



今年「マキノジンプレミアム土佐文旦フレーバー」がシルバー賞を、「マキノジンベアシック」はブロンズ賞をそれぞれ受賞！IWSC2025の審査員のテイステイングノートでは「マキノジンプレミアム土佐文旦フレーバーは、フローラル、シトラス、ドライフルーツ、素朴な香り。味わいは心地よい甘さを提供し、鮮やかな柑橘類とハーブのニュアンス、ジュニパーのタッチが特徴です。香ばしく余韻のあるフィニッシュが、美しく複雑な体験を生み出しています」とのこと。マキノジンベアシックは、「松とカッシアの樹皮の複雑な香りが、コリアンダー、柑橘類、余韻の残るスパイスの丸みを帯びた味わいに導きます」と評されました。

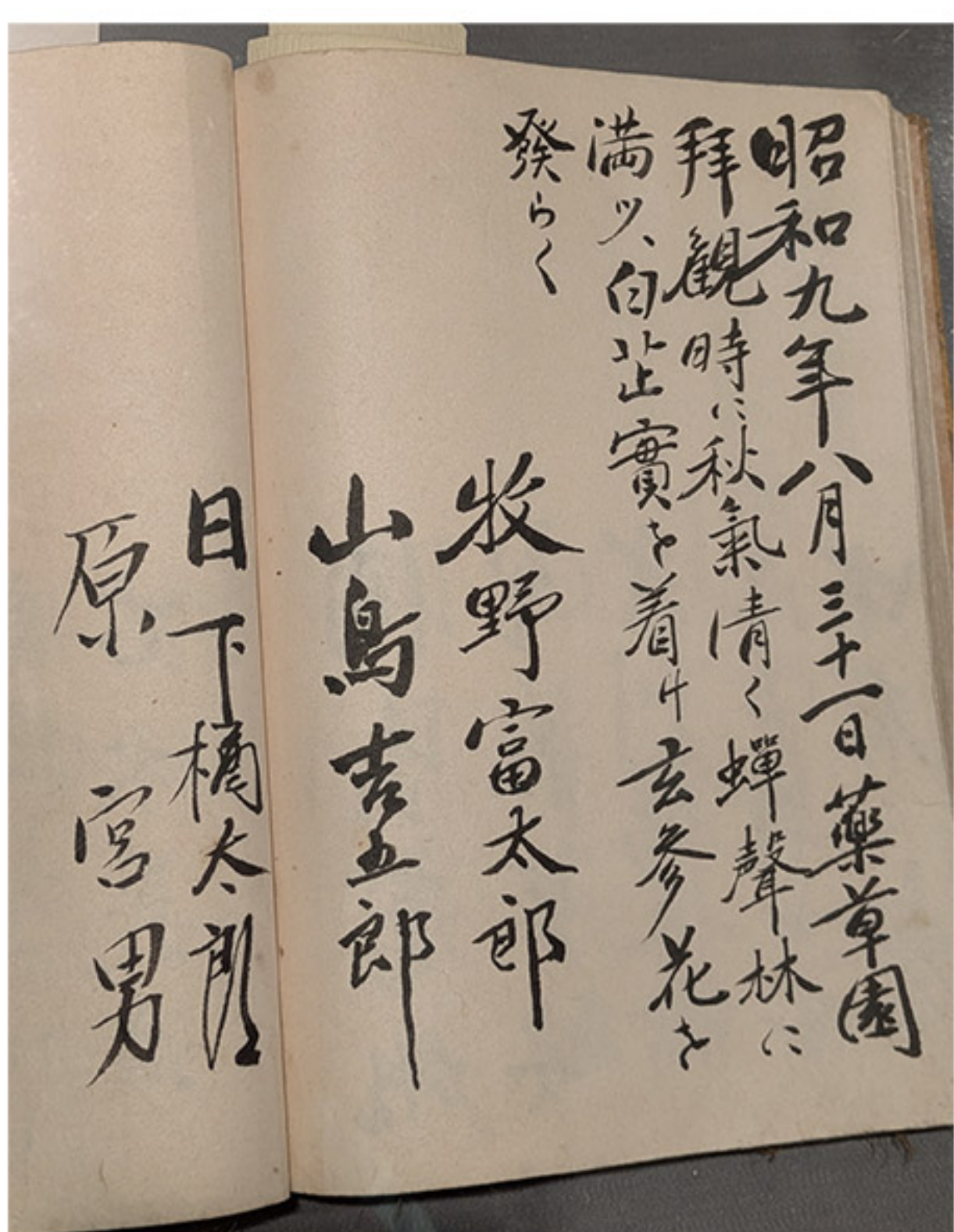
今年も会えました！ヒノキ林にプクプクの黄色い絨毯。絶滅危惧種だったガンセキランが、地元住民の手により約2千株の群生に！

佐川町牧野公園。牧野富太郎博士のお墓の奥には見頃を過ぎたバイカオウレンの森が広がっています。その森を見下ろすように階段を登って行くと、ヒノキ林に見事なガンセキランの群生が！(今年の見頃は5月中旬〜6月上旬でした)公園の植物を手入れしてくださっている「牧野公園はななりC-LOVE(くらぶ)」の皆さんのおかげで、今年もゲストの感嘆の声を聞くことができました！



ガンセキランの群生 (佐川町牧野公園)

探訪牧野博士の歩いた道 日本最古の私設薬用植物園は薬草のタイムカプセル



森野旧薬園芳名帳

史跡 森野旧薬園は、奈良県東部、古代から「阿騎野(あきの)」と呼ばれる宮廷の薬圃の地でもあった宇陀市大宇陀にあります。近鉄大阪線榛原駅からバスで約20分、標高473mの古城山の麓、宇陀市松山重要伝統的建造物群保存地区にある森野家の裏山に日本最古の私設薬用植物園は息づいています。



森野旧薬園入口

大阪大学総合芸術博物館蔵書『森野旧薬園と松山本草 薬草のタイムカプセル』高橋京子・森野薫子著(2021)によると、同園は享保14年(1729)に森野初代藤助通貞(号・養野)により創始され、漢薬種の育種・栽培・生産など、幕府が展開した薬草政策の一翼を担いました。当時、八代將軍吉宗のもと

で展開された享保改革期の薬草政策は、財政再建、漢薬の安定供給・疫病対策を達成する国家プロジェクトで、国産生薬の開発・育成・実践が有効に機能した。薬園でした。『増補改訂日本薬園史の研究』上田三平著、三浦三郎編(渡辺書店1972年)で森野藤助(1690〜1767)を詳しくみると、「家は世々農を業とし傍ら葛粉の製造に従事し葛屋として聞えていた。藤助は幼少の頃から薬草の類を好み屋敷内にこれを栽培していたが、享保十四年四月幕府の御薬草御用植村佐平次が採薬のため大和に來た時、代官鈴木小衛門の推挙によって薬草見習として大和各地の案内に努めた」とあります。



トウキ



ハナノキ



原野悦良氏(左)と筆者



森野旧薬園内

です。享保14年4月4日の室生山の見分から始まり7月26日に解散した約4ヶ月間の植村佐平次との採薬随行で藤助は認められ、ニッケイ、ニンジンボク、カンゾウ、サンシユ、ナンキンハゼ、テンダイウヤクの6種類の生薬を幕府より拝領。それらを自宅裏の丘に植え付け、かつ採薬中各地で見えた薬草類を漸次栽培したのがこの薬園の起源です。



テンダイウヤク



キクバオウレン



カザグルマ



リンドウ



幕府下付 300 年のサンシユ



悦良氏(昭和7年生)に会うことができました。



森野旧薬園内

明治以降の近代化で伝統的な和漢薬が衰退し、各地の薬園がなくなっていくなかでも、同園は森野家や多くの支持者の努力により維持され大正15年には国の史跡指定を受けました。その支持者のなかには、牧野博士が大正5年(1916)に創刊した『植物研究雑誌』の発行で大正15年(1926)から引き受けた津村順天堂創業者津村重舎氏(宇陀市出身)もいたことが今回の訪問で分かりました。

幕府から下付され約300年を経たサンシユの古木も健在、ハナノキ(ハナカエデ)という大木もありました。

現在、株式会社森野吉野葛本舗により運営されている森野旧薬園の資料室では2025年春季展覧会(主催／森野旧薬園、共催／大阪大学総合博物館)が開催されていました。

■森野家のあゆみと学際的交流、薬草栽培への情熱と挑戦、■旧葛工房にみる製造技術／水飛法と寒晒しについての貴重な資料を展示。森野賽郭が薬園内の植物を写生した精緻な原色植物画「松山本草」(レプリカ)もあり、牧野博士の先達・森野賽郭の本草家としての力量を見ることができました。

驚いたのは大正8年10月20日と昭和9年8月31日に牧野博士が記載した森野旧薬園芳名帳が展示されていたことです。西宮高等女学校長・山鳥吉五郎等と訪れた昭和9年の記帳で牧野博士は自身の名前の前に「薬草園拝観時に秋気清く蟬聲林に満つ、白芷實を着け玄参花を發らく」と記しています。生薬名白芷(ビャクシ)の和名はヨロイグサ、同じく玄参(ゲンジン)はゴマノハグサであるようです。和名でなく生薬名を書いているところが面白いですね。

同薬園の植物管理を担当する原野悦良氏(昭和7年生)に会うことができました。

原野氏は「多様な植物の性質を熟知していて、栽培と半栽培を使い分けながら多数の植物を維持し続けています」、「半栽培は農学や環境社会学以外の分野ではあまり使われない言葉ですが、古代から続く持続低利用の知恵を反映する行為です。積極的な栽培行為に比べ、単位面積当たりの収穫量や植物の成長量は低いとされますが、栽培化症候群(栽培を重ねるごとに植物の遺伝的多様性が野生と異なったものに変化する現象)を抑制し、自生地の保全が容易になります」(大阪大学総合芸術博物館蔵書7)。薬草のタイムカプセル・森野旧薬園の花守原野さんと出会うことができ、佐川町牧野公園の花守として励まされ、元気をいただきました。私が訪ねたのは5月中旬ですが、四季折々訪ねてみたい史跡ですね。

なお、今回の探訪では、宇陀市観光ボランティアガイドの会の紙谷尚永様に大変お世話になり、万葉ロマンあふれる薬草の町・大宇陀を堪能できました。ほんとうに有難うございました。(市川浩司)

ただ今、マキノジン新商品 新高梨フレーバーを造りたい】のクラウドファンディングに挑戦中です。これでゴールド賞を狙います。応援、ご支援よろしくお願いします！

BAR Craps Owner Bartender 塩田 貴志

■詳細・ご支援方法はこちらのQRコードからご覧いただけます。よろしく願い申し上げます。目標金額：300万円 支援募集期間7月31日まで

